

よみがえれ大地

角田光男



よみがえれ大地^{だいち}

角田光男





少年少女／創作文学

よみがえれ大地

N. D. C. 913 偕成社 226p 21cm 1972年

発行 昭和47年 5

著者	かく	た	みつ	お
	角	田	光	男
発行者	今	村		広

発行所 株式会社 偕成社

東京都新宿区市ヶ谷砂土原町3の5

TEL (03) 260-3221 (代) 〒162

振替 東京1352番

本文印刷 新興印刷製本株式会社

多色印刷 小宮山印刷株式会社

製本 文勇堂製本工業株式会社

落丁本・乱丁本はおとりかえいたします。

8393-719130-0904

© 角田光男 1972

はしがき

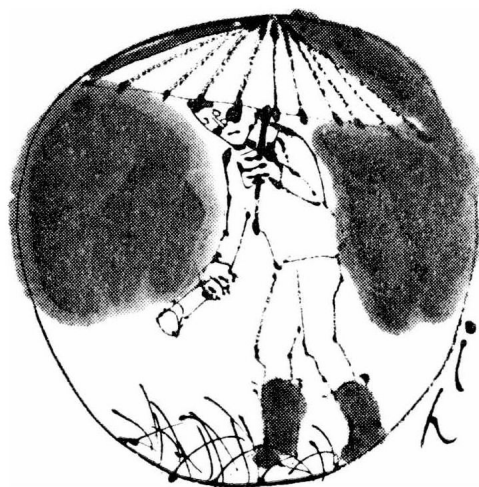
森が流れる。

畑、田んぼも流れくたる。

家も、学校も、人間たちのくらしをのせた
まま、不気味にすべりおちていく。

地すべりは、大地が病気におかされたが
ただ。ぼくたち人間は、それに、どう立ちむ
かったらいいのだろう。おそれ、おののいて、
にげまわるほかないのだろうか。

これは、はげしい地すべり地帯に生きる、
ひとりの少年の日記である。





よみがえれ大地／もくじ

第一章 村が流れる 5

第二章 人間ヤドカリ 71

第三章 少年行動隊 121

第四章 あすをよぶひびき 191

この作品と著者の世界 英雄



作者・^{かくた みつお}角田 光男

1924年，新潟県に生まれる。新津市で20年余の教員生活を経て1966年上京，以後創作活動を続ける。日本児童文学者協会会員。著書、『やぶれだいこ鬼だいこ』『森の子村の子キツネの子』『つむじまがり へそまがり』など多数。現住所／東京都練馬区大泉学園町2607

画家・^{きたじま しんぺい}北島 新平

1926年，福島県に生まれる。教員生活を経たのち，現在絵本，さし絵で活躍中。信州童画会会員。「とうげの旗」同人。『きょうまんさまの夜』『春駒のうた』『てんりゅう』『海にはあしたがある』など多数の作品がある。現住所／埼玉県川口市上青木町3-1373-2 清水方

第一章
村が流れる



五月十日（目）

きょう、たいへんなことをやらかしてしまった。それで、こんな日記を書きだしている。なにか書いていれば、気がまぎれるからだ。

作文の時間になると、たいていのは、うんざりした声をだすが、ぼくは、そんなことはない。そして、たいてい、「豊^{ゆたか}のは、よく書いてたぞ」と、受け持ちのじさまにほめられるんだ。それで日記を書きだしたわけ。

かあさんは、よく、へとんちき^{へとんちき}って、ぼくをよぶのだが、きょうのしくじりは、ちっとばかりでつかい。だから、「とんちき！」と、どならただけで、すみそうもない。こうやって、日記を書いてても、びくびくしてる。

それは、学校からかえってきて、要平^{ようへい}とあそんでいたときだった。

「おい。また、カメラマンがきているで。」

恵ちゃん^{けいちゃん}が、下道^{したみち}からやってきておしえた。

「それがよ。ちっとばか、手つだってもらいたってさ。」

恵ちゃんは、ズボンのポケットから、ボールペンをひっこぬいて見せた。赤と青と黒色のボールペンが、指さき^{ゆびさき}で、チャツ、チャツと、きりかえられるしかけになったものだ。

「手つだったら、これをもらえるよ。」

恵ちゃん^{けいちゃん}は、また、チャツ、チャツ、音をたてさせた。

「それ、去年の暮れの、大売りだしのときの、景品ののこりもんじゃないけ。」

ぼくがうたがったら、恵ちゃんは、いやな顔をした。

ぼくも、要平も、恵ちゃんも六年生。クラスもおなじだが、恵ちゃんとは、それほどなかよしではない。恵ちゃんのうちは、電気器具店で、なん年かまえに、にぎやかな町からひっこしてきた。商売屋のうちの子どもなせいか、恵ちゃんは、なかなかはしっこい。そんなところが気に入らないんだ。

「うそだと思うんなら、これ、見ろよ。」

恵ちゃんは、ボールペンをつきだして、にぎりのところを指さした。KBKと、金色の文字がくっついていた。それは、テレビ会社の名だそうだ。

「よし、いこうか。」

ぼくは、下道へかけおりた。そしたら、要平は、そのぼくをおいこして、さきになった。「清三さんの、ぼろ家のとこだからな。」

恵ちゃんが、うしろでどなった。

ぼろ家のまえへいったら、おじさんが、石にこしをおろして、たばこをふかしていた。その人が、KBKのカメラマンだった。服のそでに、赤い字で書かれたわん章をつけていた。

撮影機は、三十メートルばかりはなれたジャガイモ畑に、三脚にのせられている。

「三人でできてくれたか。それならだいじょうぶだな。」

おじさんは、たばこをもみけして、立ちあがった。

手つだいというのは、清三せいぞうさんのぼろ家の撮影さつえいをするから、その家を、うまく、ぐらぐらとゆすつてくれというものだった。

ぼろ家のうらへまわったら、土台どだいの下に、丸太まるたがくわせてある。ぼくたちが、その丸太にぶらさがると、てこの理屈りくつで、ぼろ家が、ぐらぐらゆれるしかけた。

松の峠村まつとうげむらは、ありがたいことではないが、地すべりで、すっかり有名になっている。

それで、こんな山奥やまおくの村なのに、新聞社しんぶんしゃだ、テレビ局てれびきょくだ、ニュース映画社えいがしやだなんてところから、いれかわり、たちかわり、記者きしやや、カメラマンがやってくる。

ついこのあいだも、T H K放送局ティーエイチケーほうそうきょくの人がきて、子どもの作文を録音ろくおんしていった。そのとき、ぼくも作文を読んだ。そして、「じょうずだったよ」と、ほめられたんだ。

それにしても、家のゆれるところを、うまく、カメラにおさめようと思いついたのは、このおじさんがはじめてだったろう。

松の峠村まつとうげのなかで、このごろ、地すべりのはげしくなりだしているのが、この松沢地区まつざわだそう。松沢は、松の峠村の中心地で、役場やくば・学校がっこう・消防ポンプ置き場しょうぼうおきばなど、村のだいじなもののおかたは、ここにあつまっている。村の大通りにそって、商店しょうてんも、二十けんあまりならんでいて、ちょっと町らしい感じかんじがするところだ。

恵ちゃんけいちゃんとところの電気店は、役場のすぐそばで、村でもいちばんいい場所だ。

ぼくや要平ようへいのうちは、百姓ひやくしやうやつてゐる。うちは、大通りにそつてゐるものの、ずっと西のはずれになり、山杉川やますぎがわのちかくのさびしいところだ。

清三さんせいざうのうちは、大通りから、ふもとのほうへ、ずっとさがつた下道したみちにそつてゐる。その家が、松沢地区まつざわちくでは、まっさきに、地すべりにやられてしまった。

清三さんたちは、ここから北にある栃窪地区とちくぼにあき家あきやを見つけ、そこへうつてくらしている。撮影機さつえいきをのぞいていたおじさんが、右手をふりまわしながら、ぼくたちにどなった。

「それでは、ゆっくり、ゆっくり、ゆすつておくれよ。」

ぼくたち三人は、丸太まるたのはしにぶらさがつた。だが、丸太は、びくともしない。うちがゆれたようすもない。

そのぼろ家は、前がわの土台どだいの下したの土がくずれ、いまにも、まへのめりになつて、山杉川やますぎがわのほうへ、ころがりおちそうになつてゐる。まもなく、役場の人たちが、ぶっこわすらしいともいつてゐる。それほどひどく、がたがたになつてゐる家だが、いざとなると、なかなか、がっちりしたものだ。

「よう、ぼうやたち。もっと力をいれてよ。おなかへつてゐるわけでもないだろうが。」

おじさんが、またどなる。

「ようし、それなら。」

ぼくたちは、はずみをつけるようにしながら、丸太にぶらさがつた。うまくいきそうだった。



丸太^{まるた}がうごいた。ぼろ家^やもうごいたようだ。

「その調子^{ちょうし}でいいぞう。」

撮影機^{さつえいき}をのぞきながら、おじさんがけしかける。

ぼくたちは、ますます、はりきった。とびあがっては、はずみをつけた。

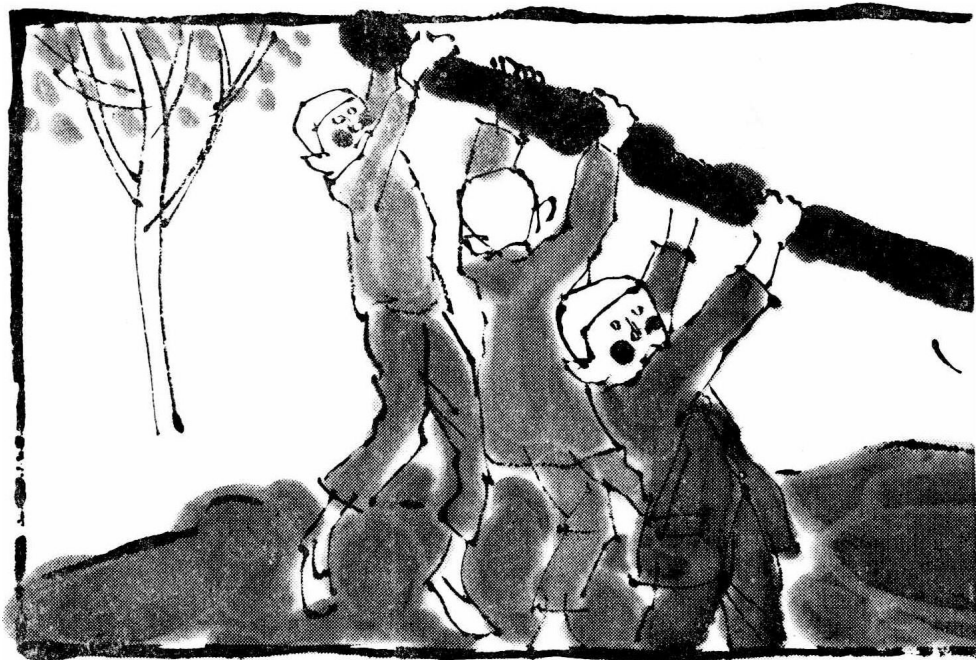
ぼろ家は、ゆすられているうちに、土台^{どだい}の下^{した}の土が、ますますくずれてしまったらしい。やがて、ギシ、ギシと、家のきしむ音もきこえだした。

「ようし。も、もう、けっこう。」

おじさんの声が、いくらか、あわてぎみになった。

「それでは、もうひとつ、おまけにそいっ。」
ぼくは、ことさら力をこめて、さいごのひとつをゆさぶった。

それがわるかった。



ワリ、ワリワリッ。木が、はげしくおれる音がして、目のまえのぼろ家がなくなってしまった。いや、はげしい土けむりをたて、おりたたまれながら、地すべりのがけを、山杉川のちかくまでくずれおちていったのだ。

「ぼくじゃないで。うちをぶっこわしたのは、豊だぞ。」

恵ちゃんの声で、夢からさめた気分になった。

ふりかえったら、恵ちゃんは、もうにげだしていた。

「豊、ぼくたちも、にげよう。」

要平とぼくは、恵ちゃんとちがったほうへ走りだした。

しばらくしてふりかえったが、あのおじさんが、追いかけてくるようすはなかった。

おじさんは、ぶじだったはずだ。ぼろ家が

くずれたあとも、カメラとおじさんは、ジャガイモ畑に立っていたのだったから。

あとで気がついたのだが、おこるのは、おじさんではなくて、清三さんなんだ。

清三さんのよくたかり、けちんぼうは、村一だ。人がすんでいないぼろ家をつぶされたことだって、目をとんがらせてどなりこんでくるだろう。そうになったら、ぼくは、とうさんとかあさんになつと、おこられる。

こんばんは、おっかない夢を見そうだな。

五月十一日（月）

びくびくしながら、学校へいった。でも、心配してたことは、なにもおこらなかった。

一時間めがはじまり、じさまが教だんにあがったとき、気が気でなかった。じさまは、村山先生のあだ名だ。からだ小さくて、しわだらけの顔なもので、みんながそういう。ほんとうの年も、もうちつとで、学校をやめるほどなのかもしれない。

「さて、きょうもはりきってやろうかの。」

じさまは、なにごとでもなかった調子で、国語の本をひらくようにいった。

それをきいたら、からだからも、頭のなかからも、すうと力がぬけたようになった。

だれでもそうだろうが、みんなのまえで、説教されるのは、まったくかなわない。恵ちゃん、いつも、いい気味だという顔で見てるし、康子はまた、かわいそうにと、同情しきった目で見つ

づけるし。

ぼくと要平ようへいは、じさまに見えないように、本で顔をかくして、わらいあった。なにも、それほどに、おろおろすることはなかったのかもしれない。

考えてみれば、あんなぼろ家、そのうち、役場やくばの人が、こわしてしまはずのものだったし、清三せいぞうさんは、あそこよりも、ぐんとかつちりした家に、ちゃんとはいりこんでいるのだから。

清三さんがいるのは、栃窪とちくぼの大久保自転車店おおくぼじてんしゃてんだったところだ。

大久保さんは、地すべりがだんだんひどくなるということで、この村に見きりをつけ、直江津なおえつへこしていった。

清三さんは、そこがあき家になるなり、ことわりもしないで、ひっこしていった。役場の人や、近所の人たちも、清三さんのうちがひどくいたんでいるのを知っているから、そのまま、大目おおめで見ることになったらしい。

休み時間になったら、恵ちゃんけいちゃんが、ぼくと、要平のそばへやってきた。

「じさまが、なにもいわないんで、ほっとしただろうが。」

恵ちゃんは、じぶんにも、なんにも責任せきにんがないようないかたをした。

ぼくも、要平も、そんな恵ちゃんのあいてにならなかった。

「でも、あの清三さんだからな。このままですみはしないで。きょうあたり、学校へも、要平や、豊ゆたかのうちへも、きつと、ことわりにまわるで。」

恵ちゃんは、なおもおどかす。

恵ちゃんは、大きいだ。きのうは、ボールペンにつられてしまって、あんな失敗をやってしまったのだが、いつもなら、恵ちゃんなどと、あそびはしないのだ。

だから、ぼくも負けずにいいかえした。

「清三さんにおこられたなら、恵ちゃんがさそったんだから、恵ちゃんだけをおこってよと、そういうからさ。」

「そりゃちがうで。もうひとつ、おまけにと、はずみをつけたの、豊だからな。犯人は、豊だけさ。」

恵ちゃんは、あごをつきだしていう。にくったらしいたら、ありはしない。

じさまは、とうとう、なんにもいわなかったけど、ぼくたちが、きのう、うちを一けんぶっこわしたことは、教室じゅうにしれわたってるようだった。

学校からのかえり、康子たちを追いかそうとしたら、

「豊さん。きのう、やったでしょう。」

康子がいった。マスミも、うすわらいをうかべている。

「やったって、なんのことかい。」

ぼくは、とぼけた。

「ぼくが、ね小便でも、たれたっていうのかい。」